

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2009

課題番号：20720086

研究課題名（和文） シェイクスピア悲劇の主人公達が有していた道化的性格の究明

研究課題名（英文） An Investigation of the Clownish Aspects of Shakespeare's Tragic Heroes

研究代表者

五十嵐 博久（IGARASHI HIROHISA）

東洋大学・生命科学部・准教授

研究者番号：20300634

研究成果の概要(和文): 初演舞台ではリチャード・バーベッジが演じたハムレット、オセロー、マクベスなどのシェイクスピア悲劇の主人公達は、道化的な性格をその核とする人物として演じられていた。しかし、18世紀後期を契機としてその様相が色褪せ、19世紀以降のロマン主義批評によって脚色され、その結果として、悲劇的人物の枠においてその存在が規定されるに至ったと考えられる。

研究成果の概要(英文): When Shakespeare's tragic heroes such as Hamlet, Othello and Macbeth were played by Richard Burbage for the first time, their characteristics essentially fulfilled the conditions of stage clowns. The late eighteenth century marked the moment where such characteristics began to fade away, and in the Romantic criticism of the nineteenth century the features of these characters were repainted, and their identities became increasingly defined in the frame of tragic heroes.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：シェイクスピア、リチャード・バーベッジ、ハムレット、マクベス、オセロー、道化

1. 研究開始当初の背景

シェイクスピア劇に登場する人物達は、時として、あたかも現代に生きる我々自身を描くかの如く写実的であり、その傾向は、特に、ハムレットの人物描写において最も顕著に窺うことができる。一方、シェイクスピアが

芝居を書いていたのは、リアリズムの時代とは価値観が大きく隔たるルネッサンスの時代であって、シェイクスピアが写実性を意図して芝居を書いていたとは考えにくい。ハムレットの写実性は、本文校訂の歴史が現代テキストにもたらしたものであって、初演舞台

での人物造形の醍醐味は別の所に存在したのではないだろうか、というかねてからの素朴な疑問が、本研究を思い立ったそもそもの動機であった。初演でハムレットを演じたりチャード・パーベッジという役者について調べてゆくうちに、悲劇役者として知られるこの役者が、じつは、定説とは異なり、喜劇的人物の役をより得意とする役者であったと思われる記述に直面した。もし、初演の頃は、ハムレットが喜劇的人物として演じられていたというのなら、悲劇的要素として分類されるその複雑な性格描写の写実性は、シェイクスピアが本来意図したものではなかったということになるのではあるまいかという思いに至った。

研究開始の時期までに、筆者は、『ハムレット』に関して二本の論文を書いていた。一つは、『ハムレット』に「技巧面の不首尾」をもたらすもの？(『広島女学院大学英語英米文学研究』第9号(2001), pp. 1-37)である。この論考では、T. S. Eliot が『ハムレット』にみとめた不首尾が、通常「良質の版」とされる第二・四折本(Q2)において加筆され、そして、おそらく、初演舞台では上演されなかった部分に起因している可能性があることを指摘した。それによって、ハムレットの内面の写実性と深く関わるその加筆部分が、後の本文校訂史において重要視されてきた経緯を考察することができた。もう一つの論考は、「恋煩いとしてのハムレットの狂気」(『広島女学院大学英語英米文学研究』第13号(2005), pp. 21-44)である。本論考では、リチャード・パーベッジが演じたハムレットの狂気が、17世紀のいくつかの言説の中では「恋煩いの狂気」として表象されている事実を指摘した上で、ハムレットの狂気をそのように分類できる根拠をテキスト分析によって示した。

以上の二つの論文の他、本研究助成金への申請段階において、マクベスの道化的側面について論じた「道化的人物としてのマクベス」(長尾輝彦編『文学研究は何のため』、北海道大学出版会、2008, pp. 25-47)と、18世紀後期の批評がハムレットの性格批評に及ぼした影響について論じた“The Influence of Late Eighteenth-Century Criticism on Modern Representations of Hamlet's Character”(『広島女学院大学英語英米文学研究』第16号(2008)を執筆していた。

これらの論考を総合し、また、さらに深化させることで、一本の英語論文の形式にまとめてみたいという思いが募り、本助成金を申請した。作成した英語論文は、現在社会人学生として在籍している広島大学大学院に博士論文として提出し、その後、速やかに、研究書として出版することを予定していた。

2. 研究の目的

初期近代におけるイングランドの演劇風土では、シェイクスピア悲劇の主人公達は、祝祭性を基調とし、喜劇的な人物として描かれていたが、19世紀のロマン主義批評以降の作品受容史において、その要素が次第に消えていったという仮説を証明してゆくことが、本研究の目的であった。

具体的には、次の(1)～(7)の七つの項目に関して調査を行うこととした。

(1) ロマン主義時代降の受容史の問題について

ロマン主義批評に端を発し、20世紀のA. C. Bradleyに代表される「性格批評」の言説では、ハムレットが近代人の複雑な内面性を有し、読者ないしは観客の共感を呼び起こす人物として解釈されてきたが、いつ、何をきっかけとして、どうして、そのような批評傾向が生じたのかを検証する。上記の拙論“The Influence of Late Eighteenth-Century Criticism on Modern Representations of Hamlet's Character”(2008)において見出した結論は、「18世紀後期の医学的批評言説が、ハムレットを、科学によって解明すべき謎を有する人物に仕立て上げた」というものであった。その説を再検証することで、ロマン主義時代以降の受容の問題に迫る。

(2) 『ハムレット』の本文編纂史の問題について

第一・四折本(Q1)、第二・四折本(Q2)および、フォリオ(F)の関係性についての定説を見直し、ハムレットの内面的描写が、最も格調高い詩的言語によって綴られた版であるQ2を底本としてなされてきた、これまでの本文編纂史の問題を明らかにし、また、Q1が初演の形に最も近いテキストであることを示す。初演の頃は、実際には上演されなかった部分が、18世紀以降の批評史においてクローズアップされたという可能性を論じる。

(3) 喜劇的モチーフとしてのメランコリーについて

これまで性格悲劇の主要な要素としてみなされてきたハムレットの「憂鬱」(melancholy)は、シェイクスピアの演劇世界ではありふれた一つの喜劇的モチーフであったことを論証する。既に発表している拙論“A View of Melancholy in Shakespeare's Plays”(『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第10号(2007)の再検証を通じてこれを行う。

(4) ハムレットのメランコリーについて

(3)で確認した“melancholy”の特質を、シェイクスピアは『ハムレット』においてどのように利用しているか考察する。ハムレットが喜劇的人物として意図されていた事実の確認を行う。

(5) リチャード・バーベッジとハムレットについて

リチャード・バーベッジが道化的人物の役を得意とする喜劇役者であったことを証明し、定説の塗り替えを行う。そのうえで、初演当時、ハムレットは道化的な人物として舞台を風靡していた事実を再確認する。既に発表している拙論「恋煩いとしてのハムレットの狂気」(2005)を再考し、ハムレットが恋煩いに狂うヴァイス・フル(初期近代劇における伝統的な道化)として表象されていた事実を論証してゆく。

(6) 喜劇的人物としてのオセローについて

リチャード・バーベッジが演じた悲劇的人物であるオセローが、ハムレットと同様に道化的人物としての色彩を色濃く放っていた事実を確認する。具体的には、オセローとデズデモナの結婚に関わるプロットが喜劇的に構成されていることを確認し、その中で、オセローが道化的な役割を担っていたことを論証する。

(7) 喜劇的人物としてのマクベスについて

同じくリチャード・バーベッジが演じた悲劇的主人公マクベスも、また、カーニヴァル的な笑いを誘発する道化的存在であったことを確認する。マクベスは、通常、御前上演のために書かれた崇高な悲劇と考えられているが、大衆的な低喜劇の要素が過分に含まれている事実を示し、その喜劇的な時空の存在として登場する道化役者としてのマクベスの性格を、テキスト分析によって解明する。

これらの調査によって得られた成果を一本の英語論文にまとめて成果を公表し、専門家諸氏の批判を仰ぐことが、本研究が目指す最終目標である。

3. 研究の方法

本研究は、申請者本人が単独で行うため、主として、個人研究室や図書館等大学付属の設備を利用しての集書及び文献の精査が中心となった。しかしながら、所属する大学(広島女学院大学、東洋大学板倉キャンパス)の図書館は規模が小さく、研究に必要な図書やデータベース等が常備された環境ではないため、国内外の他大学図書館等の資料を貸借

するか、又は、新たに基礎的な資料を購入する必要があり、頻繁にそれらを行った。(文献送料や複写代の多くは、所属する大学にて配分される個人研究費ならびに私費で支払った。)

平成20年度の夏季休暇を利用し、ヴィクトリア大学(カナダ)に客員研究員として赴き、当大学付属図書館にて文献収集を行うと同時に、当大学の研究者諸氏から、研究へのフィードバックを受けた。滞在期間は平成20年8月19日より同年9月2日の2週間(移動時間を含む)であった。当大学は、文学と医学を融合させた学際分野の開拓に力を注いでいるため、その分野に通じたルネッサンス研究者が集い、その分野の書誌が充実している。また、EEBOやECCOをはじめとするデータベースが揃い、研究員として在籍することで、それ以降一年間は、帰国後もそのデータベースが利用できる。したがって、2009年の夏までそのデータベースを利用して文献調査を行った。ヴィクトリア大学滞在中は、ルネッサンス英文学の専門家で、英文科所属のDr. Gary Kuchar氏の指導を仰ぎ、帰国後も、現在に至るまで、Emailにて情報交換を行っている。

国内では、日本英文学会中国四国支部、日本シェイクスピア協会、九州シェイクスピア研究会、関西シェイクスピア研究会、シェイクスピアと現代作家の会での活動を通じて、シェイクスピア研究の専門家諸氏との交流をはかった。論文の草稿を定期的に一部の親しい会員諸氏に送付して、フィードバックを得ている。また、関西シェイクスピア研究会にて一度、書評発表をし(平成21年2月22日)、シェイクスピアと現代作家の会にて一度、研究発表をし(平成21年10月14日)で、論文の中間報告を行ない、その後、会員諸氏から貴重なコメントの数々を寄せていただいている。

研究者個人による文学研究は、ややもすれば、独りよがりな考えに陥ってしまいがちである。そのことをいつも肝に銘じ、本研究の遂行にあたっては、なるべく多くの専門家諸氏と交流をはかり、積極的に意見を求めることを心掛けてきた。

4. 研究成果

「2. 研究の目的」で述べた(1)~(7)の調査については、一通り終わることができた。当初に計画していたように期間内に一冊の研究書の形で成果を公表するまでには至らなかったことが悔まれる。これは、研究期間内に生じた中国地方から関東地方への転勤に伴い、論文作成に遅延が生じたためである。現在は、一連の調査を終え、研究成果を執筆している最中であるが、最終的

には、全6章立て(A4 横書・ダブルスペース)で、約190頁~200頁程度の英語論文の形式に仕上がると思われる。未発表なので暫定的ではあるが、その表題および構成は、およそ次のようになる。

表題 The Comic Aspects of Hamlet and Their Disappearance in the Rise of Romantic Criticism (仮)

構成

Introduction

Chapter One: The Influence of Late Eighteenth-Century Criticism on the Post-Romantic Representations of Hamlet (仮)

Chapter Two: Shakespeare's Revision of Hamlet in Q2 and Its Romantic Reception (仮)

Chapter Three: Melancholy in Shakespeare's World and Hamlet (仮)

Chapter Four: Richard Burbage and the Comic Aspects of Hamlet (仮)

Chapter Five: Burbage's Other Comic Parts (1) - The Case of Othello (仮)

Chapter Six: Burbage's Other Comic Parts (2) - The Case of Macbeth (仮)

Conclusion

平成23年度内には出版助成金を申請し、成果の公表に漕ぎつけたい。

助成期間内には次の研究成果を公表した。いずれも途中成果の一部である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

五十嵐博久、道化的人物としてのオセロー、東洋大学人間科学総合研究所紀要、査読有り、第12号、2010、77-97.

五十嵐博久、ハムレットの conscience' についての一考察、広島女学院大学英語英米文学研究、査読有り、第17号、2008、1-22.

〔学会発表〕(計 2 件)

五十嵐博久、道化的存在としてのオセロー、第62回日本英文学会中国四国支部大会、査読有り、平成21年10月24日、於鳥取大学.

五十嵐博久、ハムレットの conscience' に関する一考察、第61回日本英文学会中国四国支部大会、査読あり、平成20年11月1日、於岡山大学.

6. 研究組織

(1)研究代表者

五十嵐 博久 (IGARASHI HIROHISA)
東洋大学・生命科学部・准教授
研究者番号: 20300634

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし